



読書活動への扉を開く！

No. 29

桑村小学校令和5年6月23日 文責 渡邊

「読書量」と「国語力」

このタイトルは、『毎日小学生新聞』（令和5年6月4日発行）の一面にありました。執筆者は、作家の辻村深月さんです。そう、18年の本屋大賞を「かがみの孤城」で受賞された方です。本校の「学びルーム」にある本棚の「校長コーナー」に先生の作品が並べてありますので興味のある方はどうぞ手に取ってください。

さて、書き出しはというと、ある読者の方からこんな質問を受けたということから始まります。



【R5親子読書の会より】

「本を読むことが大好きでたくさん読んでいるのですが、国語の成績がよくありません。読書量と国語力は関係ないのでしょうか」

辻村さんは、「私は読書の量と国語力は関係がある一本を読むことで国語の力は身に付く、と考えています。ただ、それは「国語力」という言葉をどう捉えるかをまずは考えてみる必要があります。」と述べています。

ここが、大切ですね。「国語力」をどう捉えるか？次のエピソードがまた、おもしろい！

「私の小説も試験問題に多く出題されるのですが一実は、作者の私が解いてみても『答えがわからない』ということがよくあります。『ここで言われていることと同じ内容を本文中に五文字で表現されている箇所を書き出せ』と言われても、『ええーっ、五文字で同じことを書いた覚えなんてないよ！』と途方に暮れてしまうことも。その後答えを見て、『ふむふむ、確かにこの箇所は同じことを表現しているとも言える』と気づく、という感じです。」

作者が解いても分からない問いを子供たちは解決しようとしているのですね。辻村さんの国語力についての所感に私は感銘を受けましたので、次に紹介します。

「国語の成績がテストで決まってしまうというなら、きっとこの力が身につかない人は、『成績が悪い』ということになってしまうのでしょうか。でも、私は『国語力』は何も学校のテストの成績だけに表れるものではないと思っています。もっとずっとずっと大きく、学校の勉強の範囲を超えて、あなたを一生支えてくれる力なのではないか、と。

本を読むことは新しい世界を知ることです。読むことで他人になれるし、行ったことのない土地にも、時間を越えた過去や未来にも行ける。自分と近しい立場以外の人の心を知ることができる。

また、読書は言葉や知識との出会いの場です。読書を通じて出会ったたくさんの言葉があなたの中に蓄積されることは、絶対に無駄になりません。（後略）」

本校で大切にしている「エンジョイ読書！」の考えは、辻村さんのそれと似ている感じを受けました。これからも読書を子供とともに楽しみ、「豊かな感性」を育みたいと思います。